論　　説

80年代の保健に思う

上市厚生病院　越　山　健　二

富山県農村医学研究会が発足してから11年目を迎え、会誌11号が刊行される。ときあたかも1980年代を迎えたわけである。1950年代（昭和25年以降)は復興の時代、1960年代（昭和35年以降）は黄金の時代、1970年代（昭和45年以降）は激動、激変の時代、1980年代は不確実、混迷の時代とも言われる。

わずか戦後30年の間に、私共の生命、健康は如何であったか、どのように変化したか、今後どうすればよいのであろうか、過ぎた時代を振り返り新しい時代に向けて考えてみたい。今日の日本は高度経済成長のおかげで、世界有数の経済大国として衣食住が豊かになり、医学の進歩と相まって急性、慢性の伝染病は姿を消し、寄生虫や炎症性の疾病も極めて少なくなり、そのため平均寿命は、わずか30年の間に、世界に類例のない延長をもたらした。この喜ぶべき現象のなかで、果して人間は健康になったのであろうか、保健上の問題も少なくなったのであろうかと反問し、いや以前にも増して不健康になり、健康疎害要因が山積しているとの認識が日々に高まっているように思われる。

終戦当時は食料をはじめ衣食住、生活に必要な物資不足は極限状態にあった。

食糧や物に強い執着と憧れをもち、それを追いつづけた過去30年の経過は盲目的に馬車馬のように働き、猛烈人間、働きばちとしていやが上にも競争意識を高め、マイホーム主義を夢みてきた。これは至極当然の事であったと思う。しかしながら一途に追い求めてきた物質文明の中に、健康や生命の安全、豊かさの夢が実現されるのであろうか。私共にはその終着駅がほのかに見えてきたように思う。それはただ日本だけに限らず世界的な視野の中から、物質には限界があり、その廃棄物の中に埋もれた過剰の消費は、生存環境を著しく汚染し、数多くの健康疎害因子を産み出した。(この様なとき即ち)、昭和48年以降２回にわたる石油ショックは、世界の経済に基本的なダメージを与えた。豊かさの現状は、油上の楼閣であり、地球の資源エネルギーは、有限のもので人類共通の財産であるとの思考も高まり、人類の生存秩序が問われる時代になった。

今日あらゆる年令層に於ける身体的機能の低下が指摘される。平均寿命の延長、人口構成の変化は成人病、老人病の増加をきたし受診率、有病率は年々高くなっていることは、各種の資料によっても明らかである。人口の流動は過疎、過密をもたらし地域環境の変化は数多くの保健問題を提起している。職場や社会環境の変動は精神的な不安、緊張を高め、精神機能の消耗を高めている。物質にあこがれ、夢をたくしたものは見せかけの豊かさであり、宴のあとの空しさを感じさせ、失望と不安をもたらし混迷の度を深めている。長い間培ってきた伝統的な文化はもはや消失し、たくましい創造力は衰え、精神的な健康、豊かな人間性は時代の推移と共に失われつつある。石油の上にきづきあげてきた高度経済成長は、もはや望めないとの指摘があり、いままでに造りあげた豊かさや、福祉に期待できない事が次第にはっきりしてきた。今更のように、こ

んなはずではなかった、思い違いであったと感じはじめた1980年代である。日本民族のすばらしい英知と適応能力はこれらの時代をたくましくのり切ってゆくと思われるが、更に筆者は過去30年の時代をⅢ期に別けて考えてみたい。

第Ⅰ期　1950年代(1950～1959年)昭25～昭34
　復興期：　　人間と自然の時代
第Ⅱ期　1960年代(1960～1969年)昭35～昭44
　黄金の時代前期：　　人間と機械の時代
第Ⅲ期　1970年代(1970～1979年)昭45～昭54
　黄金の時代後期：　　人間と機械の時代
第Ⅳ期　1980年代(1980～　　)
　不確実、昏迷の時代：　　人間と地球の時代

各期について詳述することはさけ末尾に年表をかかげ参考とするが、各期における筆者の考えを農村を主体に略記する。

第Ⅰ期は専業農家も多く、戦前の地域社会構造が維持され、今日ややもすると失はれつつある地域や家庭の保健養護があった。それは未熟なものであったが、暖かいぬくもりの中で続けられていた。生、老、病、死はもちろん、ふしん、火事、水害、旅立ち、成人、講中など村八部で知る如く地域社会の組織的な活動があり、連帯と協力、運命共同体意識で結ばれていた。家庭にも、衣・食・住に伝統的な文化形態が残され、愛情、慈しみ、報恩、感謝の心が培われていた。このような豊かな人間性は、農業が緑を生産する大地の中から学びとったものであり、そんな意味から人間と自然とのかかわりあいの深い時代であったと思われる。

この時代は農夫症など重労作業による疾病や、急性、慢性伝染病が多発し、貧血病、寄生虫病が浸淫し、結核性疾患も入院の主体を占めていた。医療給付も未熟でがまん、きがね、きづかず病が指摘され、抗生剤も未だ普及に至らず、炎症性の疾患もまだまだ多い時代であった。

第Ⅱ期は1960年代から1970年代へと、日本が高度経済成長に向けて驚異的な発展をとげ黄金の時期ともいうべき時代である。高度の技術革新により重工業化へむけて経済成長年率10.6%、所得年率10.6%の上昇を示し、ＧＮＰ世界第２位に突進し、岩戸、神武、いざなぎ景気をもたらし、三種の神器は、３Ｃ(カー、カラーテレビ、クーラー)３Ｖ(外国旅行、レジャー、別荘)へと物質による豊かさ、生活水準の急激な上昇をもたらした。工業化のすすむ中で省力化、機械化がすすめられ、農村、農家、農業の変貌も著しく、全く一変した。1960年代の疾病は姿を消し、平均寿命が年々上昇し、農夫症も軽症となり、農薬、機械による疾病、空気、水など自然環境汚染が出はじめた時代である。人口の移動により、地域は変貌し世帯数は減少し、家庭や地域の連帯、協力が薄れ、地域や家庭の保健養護が失われる傾向がでてきた。機械化がすすみ、能率化、効率化がすすめられ、価値感の変化から精神的な変化も見逃すことが出来ない時期であり人間と機械の時期とも言える。

第Ⅲ期の初めは、万国博覧会が開かれた年で、万博に象徴される如く、経済大国として、物質文明の道をひた走り、その頂点を極めた如き感がある時代で、生活水準も著しく上昇した時代といえる。しかし乍ら第Ⅱ期の末期から出現しはじめた自然環境汚染は70年代になると各地で公害が問題となり、海水汚染、農土汚染、交通災害、騒音、振動などによる疾病は恐怖の度を高めた。

平均寿命の逐年の延長と共に成人病、老人病の対策が主要課題として登場しはじめ、老令化社会への対応が問われはじめた。高度経済成長に支えられた医療給付も毎年改善され、多くの公費負担、高額医療費負担が行われ、福祉施設の充足も積極的に行われた時代であった。

僅か30年の短い期間であるが、これらの時期はまさに、有史以来の激動、激変の時代という事が出来る。この30年を経過し、新しく迎えた1980年代は不確実、昏迷の時代といわれる。世界の先進国として、大きな経済力、豊かさの反面で、W.H.Oが指摘する、身体的、精神的、社会的に調和のある健康という面から、数多くの健康疎外要因が露呈されている事を知るのである。

高度の医学知識や技術は、今後もますます進歩し、高度化、細分化するであろう。一方ではその効率化や普遍化が要求されるであろう。分化される医療は綜合的な体系での対応が求められるであろう。予防と治療が一体となった抱括医療への指向は、チームやグループ医療へとそのシステム化はさけられないと思う。コンピューターが既に医療の中で重要な位置を占めてきたが、今後は診断や治療に限らず、予防や健康管理に拡く活用されるであろう。

人間の生命、健康現象は、いまだ解明されない数多くの問題がある。特に精神、心理学的な活動は、殆んど不明といってもよいと思われる。又生体のしめすダイナミックな平衡状態（ホメオシタンス）、用不用説、悉無の法則、馴化、免疫、遺伝や体質など、各個人から得られる情報は特異的であり、いずれもその平均化、標準化、規格化は困難なものである。

私共は、ややもするとコンピューターの威力に幻惑され、効率化をいそぐ余り生体の本質を犠牲にしてはならない。筆者は、われわれは、過去30年を振りかえり、地域や家庭の果す役割や、弱者が如何に養護され、精神的な安定を保ってきたかを振りかえり、考えてみる必要があるように思う。生体は、個々別々のものであり、自己管理の機構を一層強くする必要があり、その基礎の上に立ってはじめてシステム化も可能であると考えている。

又1980年代は、生命、寿命、老化についての学問的な解明や概念についての討議が、単に医学のみならず、哲学や宗教面にも拡いひろがりの中で行われるものと思う。

更に健康や生命の養護は、エネルギー、食糧、人口問題等から世界的な視野での解明と理解が必要となり、人間生存の秩序の確立がクローズアップされなければならない。その意味から、人間と地球の時代がはじまったともいえる。

第Ⅰ期　1950年代（1950～1959年　昭和25年～昭和34年）戦後の復興期

食糧品公団解散（味噌、醤油）、米1kg62円（昭和26年）。住宅金融公庫発足。追放解除、警察予備隊設置。朝鮮戦争勃発、朝鮮特需 144億円（景気向上のさそい水）。農村医学会の発足（昭和27年）

農村、農業、農家

農業形態、作業様式は戦前と同じく専業多し。

農村：世帯数が多く、人口の流出は少なく、生活水準は低い。村として地域形態があり、相互連帯、協力がある。

農家：筋肉労働が主で農夫症多発。寄生虫や急性消化器伝染病多発。

保健と医療

家庭や村に自己管理の体制が存続（出産、疾病、乳幼児、老人など弱者対策）。医療保障が未熟で医療需要が少なく、がまん、気がね、気づかずが多く潜在疾病が多い。寄生虫や急性消化器伝染病の多発。急性化膿性疾病多発（虫垂炎、胆嚢炎、肺炎、中耳炎など）。結核は戦前と同様に多発（抗結核剤が威力を発揮）。

そ　の　他

森永砒素ミルク事件（昭和36年）、水俣病（昭和31年）、保守合同（昭和31年）、トランジスターラジオ発売（昭和31年）、合成洗剤の発売（昭和31年）、設備投資ブームはじまる（昭和31年）、三種の神器ブームはじまる（昭和31年）、週刊誌続々創刊（昭和34年）

第Ⅱ期　1960年代（1960～1969年　昭和35年～昭和44年）黄金の時代前期

結核の死亡が減少し死因第2位となる（昭和36年）

高度経済成長、所得倍増計画発表（昭和35年）、インスタント食品の続出、岩戸景気（昭和35年）、マイカー、マネービル時代はじまる（昭和35年）、G.N.P 19兆8,000億円（昭和36年）

農村、農業、農家

人口移動がはじまり専業農家減少し兼業の傾向はじまる。農村人口の減少と世帯数の減少（核家族化）、農業は省力化、機械化がすすみ人口肥料、薬品農業がすすむ。ハウス栽培（促成栽培）出稼ぎが多くなる。かあちゃん農業、三ちゃん農業。

保　　健

生活水準の向上、平均寿命の延長、人口の老令化、出生率と死亡率の低下（小産、小死）、結核が減少し成人病、老人病の増加（疾病構造の変化）1人ぐらし、ねたきり老人の増加、環境の変化による疾病増加、公害病（空気、水の汚染、食糧、添加物、農業、洗剤等）人間性の変化（商業主義中心による徳性の変化）、情報化社会、車社会、ストレス過剰による心因性疾病、社会生活不適応症候の増加、農機具災害、ハウス病、農薬中毒の多発、医学の細分化傾向、診断技術の進歩、手術野の拡大

医　　療

薬の時代（抗生物質・抗結核剤・酵素剤）→高額医療費の時代、出稼者の疾病、るす家族の保健問題、ハウス病、農薬中毒、農機具による災害、僻地、離島の医療問題（医療の切等化）

第Ⅲ期　1970年代（1970～1979年　昭和45年～昭和54年）黄金時代後期

G.N.P世界第2位となる（昭和45年73兆円）三種の神器から3C（カラーテレビ、カークーラー）時代、3V（外国旅行、レジャー招待、別荘）時代、万国博覧会（昭和45年）、世界の高級品流行（昭和46年）、減反政策、しらけムード、歩行者天国（昭和45年）、田中首相、列島改造論（昭和47年）、金脈問題、狂乱物価、土地騰貴（昭和49年）、公害が社会問題となり公害裁判行われる。富山農村医学研究会発足（昭和45年）、第1次石油ショック（昭和45年）、ロッキード事件（昭和51年）、円高不況長期化、第2石油危機（昭和52年）

農村、農業、農家

村の地域社会構造は変化し都市化傾向（核家族化、高令化、1人ぐらし）列島改造で自然は破壊、過疎現象は深刻化し、村の崩壊、住民とくに若者の意識構造の変化、米ばなれ、米が余る。三ちゃん農業から片手間農業。

保健：医療

老人病、成人病が医療面で重要な課題

医療給付の充実
診断精度の進歩
医薬品の開発
} 等による医療費の増大

救急医療
プライマリーケヤー
地域医療
} 等による医療システム化の指向高まる

肥満、糖尿病、貧血症の多発傾向

第Ⅳ期　1980年代（1980～　昭和55年　不確実、混迷の時代　）